

〔翻訳〕

ジョン・ヘンリー・ニューマン 「知識と学識」

田 中 秀 人 訳

1

英語にもギリシア語〔「ソフィア」または「ソピア」〕と同じように、知性の熟達あるいは完成ということ
ことを簡潔に、しかも一般的に表現する明確な言葉——例えば身アニマル・フレーム体に関して用いられる「健康」
とか、道徳性に関して使われる「徳」という言葉のような——があればよいのですが、そのよ
うな言葉は見当たりません。才能タレントとか能力アビリティとか天与の才とかいった言葉は、明らかに原料であり
内容であって、修練や訓練の結果たる卓越性のことではありません。ある種の知的完成に目を転ず
れば、なるほどこの目的にぴったりの言葉、例えば判断とか趣味とか技量といった言葉があります
が、しかしこのような言葉でさえも、通例実践とか技術に関する能力や習性を意味するのであって、
知性そのものの完成された状態を指すものではありません。また「叡智」という言葉は確かに他の
どれにもまして意味の広い言葉ではありますが、これは行為や人間生活と直接関わっています。

「知識」とか「学問」はなるほど純粋に知的な観念を表わしますが、やはり知性の状態あるいは質
といったものではありません。と申しますのは、知識は普通の意味では知性の一状況にすぎません
し、所有とか習性を意味するからです。また、学問とは知性自体を指すべきはずのものが、英語で
はかわりに知性の対象に充てられてきました。その結果、本日このような折に、先ず第一に、知性
を一つの目的として練磨するという、それ自体は何ら難しくない観念を持ち出してきてお伝えする
ために、次に、確かに少しも不合理ではない目的をお勧めするために、そして最後に、その目的で
ある特定の完成を示し理解していただくために、多くの言葉が必要になってくるという次第です。
誰も健康や徳を構成する要素が何であるかを経験を通して知っていますし、また誰もがこの健康
や徳が追求するに足る目的であることを認めています。ところが知性の卓越性という場合はそうで
はないのです。私が前置きに変な労力を費やしているようにみえたとしたら、こういう事情があ
るからです。

広く認められた用語がありませんので、私は知性の完成ないし徳ということ、哲学、哲学的知

識、精神の拡大あるいは啓発という名称で呼んできました。これらは今日多くの著述家がよく用いる言葉です。しかし、どのような名称を与えようとも、歴史的に考えてみると、「大学」の本分はこの知性の修養をその直接の目的とすることであり、また知性の教育に専心することだと私は信じます。ちょうど「病院」の仕事が傷病者を癒やすことにあり、「乗馬学校」、「フェンシング道場」、「体育学校」の務めが四肢の訓練にあり、「救貧院」のそれが老人を助け慰め、「孤児院」のそれが無邪気な子供たちを保護し、「刑務所」の務めが罪人を更生させることにあるように。「教会」の一機関としてではなく、そのありのままの理念において捉え考察するならば、「大学」はこの目的と使命とを有していると私は申し上げたいのです。大学は道徳を心に刻みつけることや機械的生産を目論むではありません。大学は技術や職務のために精神を修練するではありません。大学の役目は知性の修養なのです。この知性の修養という地点に辿り着いた時、大学はその学徒たちに別れを告げることになりますが、これだけのことを成就した時、その任務を果たしたことになるのです。大学は、知性がどんな事柄においてもよく理性を働かせ、真理へ到達しようと努め、それを掴むように教育するのです。

2

これが、前回の「講演」で申し上げましたように、「大学」の目的、それ自体において、「カトリック教会」や「国家」、あるいはその他大学を利用しかねないいかなる権力からも切り離して考えた場合の、大学の目的です。このことは様々な方法で例証しました。知性もそれ自体の卓越性をもっていなければならない、と私は申しました。それ特有の価値を持たないものは一つもないからです。また、知性がそれ自体の目的をもっていなかったならば、「教育する」という言葉は現に用いられているように、知性の修養という意味には用いられなかっただろうと申しました。さらに、知性がそのような目的をもっていなければ、一般に行なわれているように、ある種の知性の働きを、「有用な」との対比から「人文・教養的」と呼ぶことには何の意味もないのではないかと申しました。さらに、いかなる類の結果、作用とも無縁な、それ自体を目的とする研究とか体系に携わらせるので、この哲学的な性格の概念そのものがこのことを意味すると申し上げました。知識を哲学的に概括したり、諸学を体系づけても、事の本質からいって、その目的として何ら明確な技術とか仕事となって現われるものではないということを申し上げました。また、反対に、研究や体系化が導き出した真理の発見や観想は、それ以上何も付け加えられずとも、たしかに充分な目的であって、現にずっとそう見なされてきたのだと、私は申し上げました。

さてここでもまた、その問題を取り上げますが、知性の練磨ということが一つの明確な目的であって、それ自体で充足しており、言葉で表わそうとすれば、それは拡大であり啓発であると結論しましたが、私はさらにこの精神の広さ、力、明るさ、哲学がどこにあるかということを引き続き究

明することにしたと思います。「病院」は骨折した手足、熱病を治しますが、肉体や魂の健康ではなく、知性の健康を説く「教育機関」は何をもたらすのでしょうか？昔も今もかわらず「カトリック教会」が注目し、専有するに足るとしてきた、この教育機関の価値はいったい何なのでしょう

そこで、私はこれから行なういくつかの「講演」で、知性の練磨の結果、というより属性たるところの知性の本質及び特質といったものを調べてみなければなりません。そして、この企ての助けになるのではないかという考えから、すでに言及した幾つかの問題に立ち返ってみたいと考えています。問題は三つございます。すなわち、知性の修養と（一）単なる知識との関係、（二）職業的知識との関係、（三）宗教的知識との関係、です。言い換えるならば、「大学教育」の目的は知識の獲得や達成なのでしょう。それとも、特定の技術や仕事に熟達することなのでしょう。それとも、道徳的、宗教的な向上なのでしょう。あるいは、これら三点以外の何かなのでしょうか？これらの問題を、前に申し上げた目的のために、私は順を追って検討していきます。この気がかりな企てで今回の連続「講演」あるいは他の機会〔オクスフォード大学での「説教」1852年版〕にすでに申し上げたことを繰り返すことになっても、どうかお許し願いたいと思います。さて、先ず「単なる知識」つまり「学識」^{ラーニング}について、そしてまた、それと知性の啓発すなわち「哲学」との関係についてお話いたしたいと思います。

3

思いますに、「教育」の場として考えた場合、「大学」に対して世間一般が抱いている自明の見解はまさしく、極めて多くの問題について実に多くの知識を獲得する場といったようなものでしょう。記憶は精神の機能のうちで最初に発達するものの一つです。学童の仕事は学ぶこと、つまり記憶の中にものごとを蓄え込むことです。何年かの間、少年の知性は事実を詰め込む道具、あるいはそれを貯える入れ物にすぎません。少年は諸々の事実に出会うやいなや、それを受け入れるのです。少年は外のものを糧として生き、常に周囲に眼を配っています。さまざまな印象に対して強い感受性を持っていて、あらゆる種類の知識を吸収します。しかし、少年は周囲の人々に依存していて、言葉の真の意味で自分のものと言えるようなものはほとんど何一つもっていません。宗教、政治、文学についての見解をもっていて、少年としては、自分の見解を確信し自信をもった者がいるかもしれません。しかし、そうした見解を彼は学友や教師、あるいは場合によっては両親から学ぶのです。他のことについても、例えば学業についてみても同様です。少年の精神は注意深く、鋭敏で、素早く、記憶力にすぐれていますが、知識の獲得についてはほとんど受動的で、こう申したからといって、私は利口な少年というものを見くびっているわけではありません。地理、年代学、歴史、語学、博物学といった学科の内容を、少年は将来のための宝として積み上げるのです。それは少年に

とって豊作の七年間〔『旧約聖書』「創世記」41・47—9〕であり、彼はエジプト人のようにろくろく数えもせずに、手づかみでかき集めるのです。そして時が経つに従い、「数学の初歩」について議論する力や、「詩人」、「雄弁家」に対する趣味を修練されるわけですが、学校にいる間は、少なくともその最終学年まではただ受動的に学ぶ一方で、それ以上ではありません。そして「大学」へと巣立っていく頃には、彼は主として外的な影響と環境の奴隷と化し、事情に応じて同質、異質の、諸々の偶然の産物となってしまいます。その上、道徳的習性も少年の美点ではありますが、こうした結果を助長します。つまり、勤勉、精励、規律、迅速さ、不屈の努力といったものですが、これらは知識習得の直接的条件であって、自然こうした結果へと導くからです。習得した知識は、繰り返し申し申しますと、はっきりと、しかも即座に提示し得るものです。その種の知識は教師にとっても生徒にとっても見せるためのものです。はたで見ている人間は試験の内容は知らなくとも、問題に答えが出されたか、そうでないかは分かります。ここにまた、人々が精神の修養を知識の習得と同一視している理由があるのです。

初・中等学校から「大学」へと目を転じて、同様の観念が世間一般の心を支配していますが、その理由は、考えられる最も筋の通ったものでも次のようなものです。すなわち、習得された知識なくして真の修養などあり得ないとか、哲学は知識を前提とするとか。何らかの重大問題について自分の意見を提示するに際して、自分を正当化するためには、膨大な読書量と広範囲にわたる情報が必要とされますし、そうした学識がなければ、いかに独創的な精神の持ち主といえども、なるほど人を眩惑し、愉しませ、論破し、当惑させることはできるかもしれませんが、何か有益な結果とか信ずるに足る結論に到達することはできないでしょう。確かに、ものごとのついて人と違った見解を主張し、その見解に基づいた行動さえとる人たちがいます。皆さんも時折、精力的で創意豊かな人物を見かけることと思います。そのような人は自分の資質を信じ込み、先人たちを軽蔑し、恐れなど微塵も示すことなく、宗教、歴史、あるいはそれ以外の人気のある問題に関して自分の見解を世間に披瀝するのです。そして、その人の著作はしばらくはよく売れもし、全盛時には評判になるでしょう。しかし、それだけのことなのです。その人の読者は結局、彼の説く教えが単なる理論にすぎず、事実を表わしたものではないこと、つまり、パンではなくて馬草であることに必ずや気付くでしょうし、そうなれば人気など売り出した時と同様、突如衰えてしまいます。

さて、「知識」は精神の拡大に必要欠くべからざる条件であり、それを達成するための手段です。このことは否定できませんし、常に主張すべきことです。私はそれを第一原理とし、そこから始めることにします。しかしながら、まさしくその正当性こそが行き過ぎを生じさせ、それが問題のすべてだという考えを人々に確信させてしまうのです。偏狭な精神は知識をほとんど内包しないものと考えられ、一方、拡大した精神は多くの知識を有するものと考えられています。そしてこの問題を議論の余地のないものに行っていると思われるのが、「大学」で、その目的に沿って多くの研究が

続けられているという事実です。あらゆる科目について講義が為され、試験が行なわれ、賞が与えられます。道徳、形而上学、自然科学の「教授」がおり、語学、史学、数学、実験科学の「教授」がいます。問題の一覧表が公表されますが、それは幅と深さ、多様性と難解さにおいて驚くべきものです。論文も数多く書かれ、そこには広範な読書と多岐にわたる知識の歴然たる証拠が表われています。では、博覧強記、博識多才な人物に精神の修養という点で欠けているのは何なのでしょう？知識の習得ではない、精神の理解力とは一体何なのでしょう？哲学的平静は、膨大な知的所有物を意識し享受すること以外、一体どこに見出されるのでしょうか？

にもかかわらず、このような考えは誤りだと私は思いますし、私が今ここで為すべきことは、それが誤りであること、そして「人文・教養教育」の目的が単なる知識、すなわち内容中心に考えられた知識ではないということを示すことです。そして、私は次の手順でこの目的を首尾よく達成するでしょう。つまり、精神の啓蒙ないし拡大の過程の実例と一般に認められるであろう場合とそうでない場合の、いくつかの事例を実際にお目にかけますので、それらを比較して下されば、皆さん、「知識」、つまり知識の習得が、結局のところ、精神の拡大の真の原則か否か、あるいはその真の原則がむしろ知識を超えた何ものかでないかどうか、皆さんがご自分で判断して下さい。

4

一例を挙げましょう。ここに一人の人物がいるとします。この人物の経験は、これまで当地〔アイルランド〕であれイングランドであれ、英国の島々のどちらかといえば穏やかで気取ったところのない風景に限定されていましたが、この人が生まれてはじめて山岳地方のように、国の内外を問わず、自然が比較的荒々しくすさまじい外観を呈した地域へ行くとします。あるいは、ひっそりとした村で暮らしてきた人が、はじめて大都会へ出かける とします。そうすれば、その人はおそらくかつて経験したことのないある感情を抱くことになるだろうと、私は思うのです。彼が抱くその感情は、今まで味わってきた感情の付加や増大といったものではなく、本質的にそれとは異なる何か別種のものなのです。その人はおそらく未知の領域へ一歩を進め、しばし当惑を覚えるでしょう。彼はある種の進歩をしたのであり、精神が拡大したのを意識します。いまや彼は以前とは違った所に立っており、新しい中心を持ち、以前は知らなかった思想の広がりを持っています。

また、望遠鏡が私たちに開いてくれる天体の眺めは、精神を満たし捉えることがあるとすれば、その心をほとんど千々にかき乱し、めまいをおこさせるかもしれません。その眺めは溢れんばかりの思いをもたらしますが、それは（その言葉で何が意味されまいとも）ある種の知性の拡大と呼んでよろしいかと思われます。

そしてまた、猛獣やその他見知らぬ動物、その異様さ、その姿や仕草や習性の独創性（という言葉を使ってよろしければ）、そしてその多様性とかお互い同士の独立を目にしますと、私たちは我

を忘れて（心に思いつくままの表現を用いることをお許し願えれば）あたかも別の「創造主」のもとにある、別の被造界にでも入ったかのような心地がしてきます。私たちはこうして知識を増やしたことによって、新しい能力を手に入れ、今まで知らなかった、能力の新しい使い方を手にしたような気になるのです。ちょうど手枷足枷に慣れてきた囚人が、手足が自由になっていることに突然気づくように。

このため、「自然科学」は一般にその全部門において、「宇宙」の溢れんばかりの富と資源ばかりか、その規則正しい運行を眼前に示して学徒を高揚し刺激するのですが、最初は（こう申し上げてよければ）ほとんど息もつかせぬほど驚嘆させ、やがてその学徒の心を落ち着かせるような結果をもたらすのです。

同じく歴史の研究も精神を拡大し啓発すると言われますが、これは何故でしょうか？考えますに、それは歴史の研究が起こっては消えていく出来事及びあらゆる出来事を判断する力を精神に与え、それまでは持たなかった出来事に対する優越性を意識させるからです。

また同様に、いわゆる世間を知ること、実生活へ入り、社会へ出て行き、旅行し、社会の様々な階級を知り、様々な党派、主義、人種の思考の原理や様式に接し、その見解、目的、習性、風俗、宗教的信条や礼拝の形式に出会うこと——つまり、人間がいかに多様でありながら、同時にまたいかに似通っているか、人間の考えがいかに浅ましく、卑しく、対立し合っているか、しかもなおいかに自分の考えに確信を抱き続けているか、ということを経験すること、これらはすべて良かれ悪しかれ、人の精神に紛うことなき影響を及ぼしますが、これも一般には精神の拡大と呼ばれています。

そしてまたもう一つ、人が不信心な人々の議論や見解にはじめて触れ、それがそれまで神聖侵すべからざるものとされてきたことに目新しい光を投じているように感じ、それどころか、その種の議論にその心が屈服しそれを奉じ、今まで抱いてきた偏見をそっくりかなぐり捨て、夢から目覚めたかのように、法律とか法律違反のようなものはいまや存在せず、罪は幻、罰も作り話、罪を犯すも自由、浮世、肉欲を愉しむも勝手と考え始めたら、そしてさらに、浮き世、肉欲を享樂し、欲するところだけを欲し、「選ぶべき全世界が眼前にひろがる」[ミルトン『失樂園』12・646]と考え、そして自分の個人的な信念としてなら、どんな体系を打ち立ててもいいなどと考えるとすれば——このような勝手気ままな考えが奔流のように心に押し寄せ充満しますと、知識（あるいは知識と考えられているもの）の木の実が、拡張とか高揚といった感じ——それは実際ある種の陶醉といえるものですが、それでもなお、主観的な状態に関する限りは、一種の啓発であるのです——を伴いつつ、精神を神々のそれにも比すべきものにしてしまったことを、誰が否定しましょうか？このために、自らの「造物主」を突然捨て去る、個人あるいは国家の狂信的な行為が起こるのです。彼らの眼は見開かれます。かの「悲劇」に登場する神の裁きに打ちひしがれた王〔エウリピデス『バツカイ』中の

ベンセウス」のように、二つの太陽を見、魔法の世界を見るのですが、その魔界から、過ぎし日の信仰と無垢の状態を、自分が当時馬鹿で、詐欺のカモでしかなかったかのように、一種の軽蔑と憤怒をもって顧みるのです。

一方、「宗教」にもそれ独自の拡大がありますが、それは心の動揺の拡大ではなく、安らぎの拡大です。しばしば指摘されることですが、それまで眼に見えない世界のことなどほとんど考えたことのなかった教育のない人々は、「神」に頼り、自らの内面を探り、心を整理し、自らの行ないを改め、死と審判、天国と地獄について瞑想するようになると、知性の点で以前とは別人になったようにみえるものです。以前は、彼らはものごとをそのまま受け入れ、それ以上ものを考えるということをしませんでした。しかし、いまや、あらゆる出来事が意味を持っています。何であれ、起こったことに対して自分自身の判断を下すのです。歳月と季節とを心に留め、現在と過去とを比較します。すると、世界はもはや退屈でも単調でも、無益でも絶望的でもなくなり、多くの役割と一つの目的、そして厳粛な教訓を含んだ、変化に富んだ複雑な劇となるのです。

5

さて、これらの例から（まだ多くの例を付け加えることもできましょうが）、次のことが明らかになります。まず、知識の伝達は確かに今まで述べた意味の拡大や啓蒙の条件ないしは手段であり、このことは今日一部で盛んに言われていることですし、それを否定することはできません。しかし、次に、この知識の伝達が拡大、啓蒙の過程のすべてではないこともまた、同じくらい明白です。精神の拡大は、それまで未知であった多くの観念をただ単に受動的に受容することではなくて、なだれ込んでくるそれら新しい観念に対して、それに向かつて、その只中で直ちに反応する精神の力強い作用にあるのです。それはものを形成する力の作用であって、私たちが獲得した知識の内容に秩序と意味を与えるのです。それは知識の対象を主体的に自らのものにすることであり、分かりやすい言葉を用いれば、受け取ったものをそれまでの思想の実体へと消化・吸収することです。そして、これなくしては拡大もあり得ないと申せましょう。精神に押し寄せる諸々の観念を互いに比較し、それを体系化することがなければ、拡大などあり得ません。ただ学ぶというだけでなく、学んだことをすでに知っていることと照合する時、**その時**、私たちは精神が成長し拡大しているのを感じます。イリュミネーション啓発とは、単に知識が増えるということではなく、すでに私たちが知っていることと現に学び取っていること、つまり習得され、蓄積されたものすべてが心の中心へと引き寄せられる運動であり、前進なのです。したがって、例えばアリストテレスとか聖トマスとかニュートンとかゲーテといった知性のように、真に偉大な知性、そして万人がそう認める知性（私はこのような知性について語ろうとする時、故意にカトリックの内外から例を挙げます）、そのような知性は古いものと新しいもの、過去と現在、遠いものと近いものにつながりを認め、それらが互いに影響を

及ぼし合っていることを洞察しています。そうした知性なくしては全体も中心も存在しません。このような偉大な知性は事物についての知識のみならず、事物相互間の真の関係についての知識をも、言い換えれば、習得された知識としてだけではなく、哲学としての知識をも有しているのです。

したがって、こうした分析、分類、調和の過程が欠けていますと、精神は拡大を経験することは全くなく、いかなることが知識に加えられるようとも、啓蒙されたとか理解力が広がったとか見なされることはなくなります。例えば、すでに申し上げましたように、優れた記憶力の持ち主が哲学者になるわけではありませんが、これは辞書を文法と呼ぶことができないのと同じです。世の中には実に膨大な観念を抱いていながら、それらの観念相互の真の関係にほとんど気づいていない人たちがいます。そういう人たちは好事家であったり、年代記の編者であったり、博物学者であったりします。法律に通じている人かも知れず、統計学に通じている人かも知れません。このような人たちは、自分の持ち場では実に重宝な存在ですし、私はこの人たちに無礼なことを言うつもりは毛頭ありません。けれども、その種の学識ある人たちに精神の狭量さがないという保証は何もないのです。もし博識の人、物知りにとどまるならば、彼らは特に精神の修養の名に値するものを有していることにはならず、「人文・教養教育」のお手本となることもありません。

同様に、私たちは時々、世事によく通じていて、かつては世の中で異彩を放ちながら、総括的な結論を何ら引き出すこともなく、言葉の真の意味における意見というものを全く持たない人たちに会うことがあります。そういう人たちは人物や事物について物珍しく愉快なことをたくさん、詳細にわたって知っています。しかし、宗教的にも政治的にも何らの明確な確固たる原理のもとに生きてきたわけではないので、どんな人物、どんな事物について語るにも、それ自体で完結した多くの現象としてしか語りませんし、何も導き出すこともなく、それを吟味するでも、何らかの真理を説くでも、聴き手に教訓を垂れるわけでもなく、ただただしゃべりまくるだけなのです。いかに博識であっても、このような人たちが見事知性を修養したとか哲学に到達したなどは誰もいわないでしょう。

問題の人物が疑問の余地なくより劣った知力の持ち主で、不十分な教育しか受けていない場合も同じことが言えますが、この場合はなお一層顕著です。おそらくこの人たちは外国にすることが多く、その地でいや応なく迫り来る様々な事実をただ受動的に、空しく無益に受け入れるのです。例えば、船乗りは地球の果てから果てへと渡り歩きますが、彼らが出会う多様な外界の事物が想像力に働きかけて、釣り合いのとれた一貫した映像を結ぶことはまずありません。彼らは人生という綴れ織を裏側から眺めているようなもので、そこには何の物語もありません。彼らは眠っては起き、今ヨーロッパにいたかと思えば、今度はアジアといった具合で、大都会の光景を目にすることもあれば、未開地をも見ます。商業の中心地にいたかと思えば、南海の島々にいたりするのです。ポンペイウスの記念柱もアンデスの山々も目にします。しかし彼らが出会う何ものも、その向こう側に

ある観念へと彼らを押し進めたり、引き戻したりすることはありません。そこには何らの意味も関係もなく、歴史も前途もないのです。すべてのものが独立してそれ自体で存在し、見世物のめまぐるしく変わる舞台のように、代わる代わる現われては消えていってしまい、結局観客はもといた場所に残されてしまいます。おそらく皆さんが、何かの折にそのような人の身近にいとすれば、皆さんはその人が目の前の出来事に衝撃を受けたり、戸惑ったりするのではないかとお考えになるでしょう。ところが、この人にとっては異なった二つのものの間にはほとんど差がないのです。というより、戸惑っているとすれば、その人は何らかの意見の表明を求められていることに気づきながらも、何と言えよいか、褒めればよいか、冷やかせばよいか、それとも不満の意を表わせばよいか見当がつかないからです。何故かと申しますと、実際この人は判断の基準というものを持っておらず、結論へと導く標識を持っていないからです。そのようなものは単なる知識の習得にしかすぎないのであって、繰り返しますと、それを哲学と呼ぶことなど誰も夢にも思わないでしょう。

6

このような例を比較対照するならば、すでに私がそれよりも前に挙げた例から導き出した結論が確証されます。多くの事柄を同時に一つの統一体として眺める力、それらの事柄を普遍的体系の中でそれぞれ然るべき場所に位置づける力、それぞれの価値を理解し、相互の依存関係を決定する力、このような力こそが精神の真の拡大なのです。このようにして、前回お話した、「普遍的知識」というものが個々の知性に確立され、知性を完成させるのです。こうして精神が真に啓発されると、「知識」の広範囲にわたる内容を考察しようとすれば、必ずそれが全体の一部でしかないことを思い出し、さらにそれによって心に浮かんでくる連想を必ずするようになるものです。それはあらゆるものを、それ以外のあらゆるものへある程度導くようになりますし、全体像をすべての個々の部分に伝えるのですが、その全体は遂には想像力の中で一つの霊のようなものとなって、全体を構成する各部分のいたるところに広がり浸透して、それにある確固たる意味を与えるのです。ちょうど私たちの身体の諸器官の名を挙げれば、その器官の身体における機能を思い起こさせ、「創造」という言葉が「創造主」を暗示し、「臣下」と言えば君主を想起させるように、「哲学者」の精神においては、私たちがぼんやり考えるところでは、物質界・精神界の諸要素——学問、技術、仕事、階級、官職、出来事、意見、個性といったもの——がすべて相関的な機能をもった一つのものとして、そして、次々と結合してしだいに真の中心へと収斂する一にして全なるものと考えられています。

このような啓発された理性とか真の哲学の一部分でも所有することこそ、人間本性が知性について望み得る最高の状態です。こうしたものは精神を偶然や必然の影響の及ばぬ高所へと運び、多くの人びとの宿命たる不安や懸念、動揺や迷信から超然たらしめるのです。何かある一つの目的に取

り憑かれた人たちは、その重要性を過大視し、その追求に躍起となって、その目的をそれとは全く無関係な事物の尺度とし、たまたま失望させられると、驚き落胆します。このような人たちは始終、驚きあわてているか、有頂天になっています。反対に、固守すべき目的も原理も何ら有しない人たちは、一步踏み出すたびに道に迷ってしまいます。そのような人たちは新しい事態に直面するたびにうろたえ、何を考え、どう言ったらいいのか分からなくなってしまうのです。彼らは突然目の前に現われる人物、出来事、事実について何の見解も持っておらず、内面的な資力に欠けているために、他人の意見にすがりついてしまうのです。しかし、その力の完成を目指して修練されてきた知性、知っていながら同時に考える知性、事実や出来事の濃密なかたまりを理性のしなやかな力で発酵させることを学んだ知性、そのような知性は決して偏頗ではあり得ませんし、排他的でも性急でもあり得ません。当惑するということもあり得ませんし、ただ忍耐強く、落ち着きはらっていて、堂々として平静たらざるを得ないのです。何故なら、そのような知性は事を始めるに当たって常にその結末を、結末において常にその起源を、中断するに際し常に法則を、遅延する際は常にその限度を見定めるからであり、自分の立っている位置と、道がどう続いているかを常に知っているからなのです。それはアリストテレス逍遥学派のいう「テトラゴノス」〔「正方形」すなわち「完全」「完成」〕であり、ストア派の「ニル・アドミラリ」〔「何事をも驚嘆せず」「何物にも心を動かさず」、ホラティウス『書簡詩』1・6〕を有しているのです。

幸いなるかな、ものごとの原因を解き、あらゆる恐れと冷酷な宿命^{さだめ}、そして欲ふかな
アケロンの騒音を、足下に投げ得た人たちよ。〔ウェルギリウス『農耕詩』2・490-92〕

難局に直面するや、即座に膨大な思想や目もくらむ計画を打ち立てる人、刺激されるとあたかも靈感を得たかのように、眼前に現われる問題や事の成り行きに光明を投ずることのできる人、どんな非常時に臨んでも動じることのない平静な心を持ち、臨機の処置を施し、もの怖じせぬ寛大な態度をもって、反対するものがあればなおさら激しさを増す活力と鋭敏さを発揮する人——こういう人たちがいるものです。このようなことは天与の才であり、英雄的行為です。このようなことは天賦の才がなせる業であって、いかに修養しようとしても教えることはできませんし、いかなる「教育機関」もそれを目指すことはできません。しかし反対に、ここで私たちが問題としているのは、単なる天性^{ネイチャー}ではなく、訓練であり教育です。かの完全なる「知性」とは、「教育」の成果であり、その至高の理想であり、個々人にそれぞれの程度に応じて分け与えられるもので、私たちの限りある精神があらゆる事柄を、それぞれの事柄をその然るべき位置に、その特性を失うことなく把握し得る限り、明瞭に、冷静に、正確に洞察し理解する能力です。それは歴史を知るがゆえにほとんど予言的であり、人間性を知るがゆえにほとんど内省的です。偏狭さや偏見に囚われないがゆえに、ほとんど超自然的な愛を備えており、何ものにも驚かされることがないゆえ、ほとんど信仰による安

らぎを体現しており、ほとんど天上の瞑想の美と調和とを有しているので、永遠の秩序と天界の音楽によく通じています。

7

さてここで、知性の練磨の、そして「大学」の真の適切な目的が「学習」すなわち「知識の習得」ではなく、むしろ「知識」に「思考」ないしは「理性」を働きかけること、言い換えれば、「哲学」と呼ばれ得るものであるということをお認めいただいたとしてよければ、これでようやく今日「大学教育」という問題に付きまといっている様々な誤りをご説明申し上げることができることになります。

さて、知性を向上させようと思ったら、私たちは先ず何よりも高所に登らねばなりません。同じ高さにとどまっていたのでは、真の知識を獲得することはできません。総括的な結論を引き出さねばならず、筋道を立て、原理を把握し、それに従って習得した知識を分類し方向づけねばなりません。活動範囲が広かろうが狭かろうが問題ではありません。いかなる場合も、それを意のままにするためには、それを見下ろす高所に登らねばなりません。はじめて訪れた地が曲がりくねった小道や高い生垣や緑の傾斜地や密林、すべてがなるほど微笑んではいるが、迷宮の中にあるような、奥深く豊かな国であるとしたら、それによってもたらされた苛立たしさやもどかしさを感じない人がいるでしょうか？道路地図を持たずに見知らぬ都市を訪れる場合も、これと同じ感情が不意に襲いかかってきます。旅慣れた人は初めての土地を訪れると、近隣の地を調査するために小高い丘や教会の鐘楼に登るという話をお聞きになったことがおありかと思います。同様に、皆さんは知識より高くあらねばならず、それより低くあってはならないのです。さもないと、知識が皆さんを押し潰してしまうでしょう。そして知識を多く持てば持つほど、その重荷はより一層増していきます。サルマシウスやブルマンのような人の学識は、その当人が学識の主人にならなければ、暴君になってしまうでしょう。「命令するか、あるいは屈従するか」〔ホラティウス『書簡詩』1・10・47〕なのです。強健な腕をもってそれを振り回すことができるならば、それは大いなる武器となります。さもなければ、

思慮なき力は

おのれの重さに滅ぶ〔ホラティウス『歌章』3・4・65〕

でしょうし、皆さんは、タルピア〔ローマの総督タルピウスの娘〕のように、貢物を捧げてきた過去の諸世代から取り立てた、ずっしりと重い富に押しつぶされてしまうでしょう。

例はたくさんあります。著述家の中には、その著述の源泉が無尽蔵であると同時に、要領を得ない人たちが数多くいます。彼らは知識を生なまの塊のまま釣り合いも考えず、計画も立てずに量で測る

のです。「古典」や「聖書」の注釈者は数知れないほどいますが、私たちは自分の前を通り過ぎていった学識に驚嘆し、何故その学識が過ぎ去っていったのか訝しく思いながら、注釈者のもとを立ち去ってしまうことが何と多いことでしょう。「教会史」の著者にしても、モスハイムとかデュ・ボンとか大勢いますが、彼らの中にはその主題を細目に分類して、その主題の生命を滅ぼし、枝葉末節を気遣うあまり、主題の全体性を奪い取ってしまうようなものがいかに多いことでしょう。また十七世紀の英国の「神学者」たちの「説教」についても、種々雑多な、差し出がましい学識の蓄えでしかないことがいかに多いことでしょう。もちろん、カトリックの人たちとて、考えもせずに読んでいるのかもしれませんが。そういう人たちの場合、プロテスタントの人々と同様、その種の知識は知識の名に値しないし、筋道を立てて、とくと考え抜かれた知識ではないと言ってもよいかなと思います。このような講師リーダーは知識に取り憑かれていただけであって、知識を所有しているわけではないのです。それどころか、実際問題、自らの自由意志を持たず、しばしば知識に振り回されていることさえあります。「記憶力」が「想像力」同様、暴威を振るい得るのだということを思い起こして下さい。精神錯乱というものも私の考えでは、思想のつながりを失くしてしまった状態と見なされてきました。精神は、ひとたび活動を始めますとそれ以後は新たに始める力を奪われて、何か機械的な過程とか生理的必然によるかのように、因果の道にしたがって、ひとつの考えが別の考えを呼び起こすという、一連の連想の犠牲になってしまいます。勉強熱心な人たちを知っている人は皆、「記憶力」を刺激し過ぎた人たちに、これに似た現象が存在することを認めないわけにはいきません。そのような人たちの場合、「理性」の働きは狂人におけると同様、弱々しく無力なものなのです。いかなる問題であれ一度それに本気で取り組み始めると、彼らは自制の力を失ってしまい、最初に自分を刺激する原因となった事柄から次々と生まれ出てくる一連の刺激を受動的に耐え忍ぶのです。彼らはある観念から別の観念へと振り回されて、聴き手が十分譲歩しているにもかかわらず、一連の考えをこつこつと追い求めたり、聴き手の抗議にもかかわらず本題から逸れて絶え間なく脱線し続けるのです。ところで、当然のことですが、狂人の考えの輝きと独創性を何びとも羨望しないでしょうが、そうだとしたら、不毛な空想の犠牲とはいわぬまでも、つまらない事実の犠牲であり、内面からの病的な想像力に取り憑かれているのではないとしても、外部からの手当たり次第の侵入の犠牲となっている、知性の練磨を何故称揚せねばならないのでしょうか？しかし、こう申したからといって、私は、強靱かつ当意即妙の記憶力がそれ自体正真正銘の宝であることを否定してはいません。また、博覧強記の人を貶しているのではありません。たとえそれ以上のものではないとしても、理に適ったものでさえあれば。それは本屋さんを軽蔑しないのと同じです。本屋さんは持ち主にはそれほど価値がないとしても、他の人々にとっては大いに価値のあるものなのですから。私はまた、理想とする「大学」から深遠にして多様な学識の所有者たちを追放しようとしているわけでもありません。そんなことは断じてありません。そういう人たちは、

世間の目から見れば大学を引き立たせる飾りものなのです。私が申し上げたいのはただ、そのような人たちは大学が目指している成果のお手本たり得ないということ、議論の余地なくより高度の諸能力を犠牲にしてまで、記憶力を拡大しても知性にとっては大した利益にならないということです。

8

そしてまた、少なくとも今日、教育の過剰という危険があるなどと私は些かも考えておりません。危険はその反対側にあるのです。皆さん、私は過去二十年の事実上の誤謬についてお話したいと思います。その誤謬とは、学生の記憶力に多くの未消化な知識を詰め込むことではなく、あまりにも多くを押しつめ過ぎたので、学生がすべてを拒んでしまったということです。それは多くの無意味な科目によって学生の精神を混乱させ弱らせるという誤謬であり、十いくつもの学科目を生かじりすることが、(実際はそうなのに)浅薄ではなくて、(実際はそうではないのに)拡大であるかのようにほめかす誤謬であり、事物や人物の学問上の名称に精通し、気の利いた十二折版を蔵し、雄弁家の講演に出席し、学会の会員になり、講壇の実験や博物館の標本を見学すること、これらすべてのことが精神の浪費ではなく、進歩であると考えることの誤謬です。現在、あらゆることが同時に学ばれています。先ず一つのことを、それから別のことをというように、一つひとつを十分に学ぶのではなく、多くのことが不十分に学ばれるのです。何の努力も注意力も労苦もなしに勉学が為され、基礎知識も進歩も仕上がりありません。そこには個性的なことは全くありませんし、これこそまさしく現代の奇跡です。蒸気機関が物質に対して為すことを、印刷機が精神に対して行ないます。それは機械的な作用で、人間は書物がただ増え普及しただけで受動的に、ほとんど知らないうちに啓蒙されるのです。小中学生であれ、女学生であれ、大学生であれ、町の職工であれ、議会の政治家であれ、誰もが意味でこの途方もなく有害な妄想の犠牲となっています。賢者たちが声高に抗議してきましたが無駄でした。そして彼らも遂には、自分の属する学術機関が他に追い越され、時代の愚かさの中に消えてしまわないように、良心の許す範囲で逆らい難い時代精神に調子を合わせ、内心密かに苦笑しつつも、一時的に譲歩することを余儀なくされてきたのです。

こう申したからといって、私が国民教育についてある種の懸念を抱いているなどとお考えにならないで下さい。それどころか、真の教育であるためには、国民が教育を多く受ければ受けるほどよいのです。私はまた今はやりの科学及び文学作品の廉価版の敵でもありません。反対に、それが大いなる利益であり、利器であり、利得であると私は考えます。つまり、教育によってそれを利用する能力を授けられた人たちにとっては、ということです。さらにまた、科学や文学が供する無害な気晴らしは、若者の思索にも暇つぶしにも格好のものでありまして、彼らが好ましからぬ行ないに走ったり、悪友と交わるのを遠ざける手段ともなり得るのではないかと考えます。その上、定期刊行物や特別講演や学術機関が社会に広める化学、地理、天文学、経済、現代史、伝記、その他の学

問分野に表面的、皮相的に通じることに關しては、私はそれを優雅なたしなみ、教養人にふさわしい、いやそれどころか、今日では不可欠のたしなみであると考えております。最後に、私はこのような研究分野の一つでも徹底的に習得することを蔑んだり、それに水を注しているのでもありませんし、それ自体に関する限り、そのような徹底的な習得こそ精神の眞の教育であることを否定しているわけでもありません。私が申し上げたいのはただ、正しい名前で事物を呼びなさいということ、そして本質的に異なる觀念を混同してはいけないということです。一つの學問を徹底的に知り尽くすことと多くの學問を表面的に知っていることは別です。百個の事柄を生かじりしたり、一個の事柄を細目にわたって記憶しているからといって、哲學的、包括的見解とは申せません。氣晴らしは教育ではありませんし、たしなみも教育ではありません。結局、氣を紛らせ、生氣を取り戻し、心を静め、元氣を出し、上機嫌にし、惡徳に走るのを防ぐということだけのために、國民に教育が必要だなどと言つてはなりません。私はこのような娯樂や時間の過ごし方が何の得にもならないとは申しませんが、それは教育ではありません。植物学や貝類学の一般的知識同様、絵を描くことやフェンシングを教育と呼ぶことは差し支えありません。が、鳥の剥製を作ったり、弦樂器を奏でたりすることは、優雅な氣晴らしであり、有閑階級の退屈しのぎではありますが、教育とは申せません。それは知性を形成したり、練磨したりすることがないのです。教育とは高遠な言葉です。それは知識への準備であり、その準備に応じて知識を伝えることです。私たちは見るために肉体に備わる眼を必要としますが、それと同じで、知るために知性の眼を必要とするのです。目的も器官も共に知性的である必要がありますが、自ら進んでそうしようとしなければ、それらは得られません。眠っている間に、あるいは偶然に得られるものではないのです。いかに優れた望遠鏡といえども、眼がなければ用をなしません。印刷機や講義室は大きな助けとなりますが、私たちは自分に忠実でなければならぬし、仕事の当事者たらねばなりません。「大学」というものは、よく言われるように「恵み深き母」〔母校〕であつて、その子供たちを一人一人知り尽くしています。鋳物工場でも造幣局でも〔獄舎の懲罰用の〕踏み車でもないのです。

9

皆さん、私はこう断言します。寄宿舎も個別指導教官の監督もなく、広範囲にわたる学科試験に合格したものにはすべて学位を授与する「大学」と称するものと、オクスフォード大学が過去六十年の間そうであつたように、教授もいなければ試験も全くなく、ただ多くの若者たちを三、四年集めておいて、やがて送り出すような「大学」、この二つの方法のうちどちらが知性の修練により適しているかと問われたとしたら（いいですか、私は何もどちらが**道徳的に**優れているかと言っているわけではありません。何故なら、義務的であるにせよ、勉学はためになることですし、怠惰は我慢のならぬ災いだからです）——この二つのコースのうちどちらが首尾よく精神を練磨し、陶冶し、

拡大するか、どちらが人々を俗世間の義務により適した人間として送り出し、優れた公人、社会人、その名が後世に伝わるような人々を生み出すかを決めねばならないとしたら——何のためらいもなく、この世のありとあらゆる学問に通じることを学生たちに強要する「大学」よりも、何もしない「大学」を私は選びます。そして、これは逆説めいて聞こえるかもしれませんが、結果が諸々の体系の試金石であるのならば、前世紀における英国のパブリック・スクールや大学^{コレッジ}の及ぼした影響は、少なくとも私が指摘した対比の一方を支持するでしょう。他方、昨今、人々の想像力を惹きつけている教育の理想的形態とやらから生じるものは何か、それが果たして効果を現わすのか、そしてそれが知性の面から見て、浅薄で偏狭で内容に乏しい世代を生み出さないといえるかどうか、これらはかなり議論の余地のある問題です。しかし、次のことだけは確かです。つまり、私がお話している、最初は少年たちを、それから若者たちを大勢一ヶ所に集めておく位のことしかしない「大学」とか教育機関——道徳の面では見るも無惨に歪められ、「キリスト教」の信仰告白に関しては空疎で、異教的な倫理基準しか持たないこれらの教育機関——は少なくとも、英雄や政治家、文人哲人を連綿と世に送り出して来たこと、生来の徳によって、商才によって、人生経験によって、実際の判断によって、洗練された趣味やたしなみによって異彩を放つ人々を世に送り出して来たことを自慢することはできます。これらの人々こそ英国を現在の姿に築き上げ、世界を征服させ、カトリックに対して暴威をふるわせたのです。

このことはどう説明すればよいのでしょうか？私はこう考えます。鋭敏で、率直で、思いやりがあって、注意深い若者たち（それが若者の常です）が大勢集い、互いに自由に交わると、たとえ誰も教える者がいなくとも、必ず互いに学び合うようになるものです。あらゆる会話が一人ひとりにとって一連の講義となり、若者はひとりでに新しい思想や見解、新鮮な思索の材料、判断や行動の明確な原理を日毎獲得するようになります。幼児は五感が伝達する情報の意味を学ばねばならない、これが幼児の仕事です。幼児は眼が供するものすべてを自分に親しいものと思い込みます（実際に反対のことを学ぶまで）。こうして実践によって、動物的存在に必要な知識のうち先ず初歩的な要素の関係と効用とを確かめるのです。これと類似した教育が、私たちが社会人として存在していくために必要とされますが、それは高等学校や大学によってもたらされるものなのです。そして、この教育の効果がその世界で精神の拡大と呼ばれるのは、理に合っています。それは勞せずして世間の縮図を見ることです。と申しますのも、生徒、学生は実に様々な場所からやって来ており、はなはだ異なった考え方をしていますので、一般化すべきこと、調整すべきこと、排除すべきことが数多くあって、その集団全体が一つに形造られ、一つの校風とか氣質を形成するようになるその過程で、相互関係が明確に定められ、慣例的な規則が定められていくでしょうからです。

ここで再び申し上げておきますが、私が道徳的ないし宗教的な問題を考慮しているのではないということは、はっきりとご了解願わねばなりません。私はただ、あの若者たちの集団は一つの統一

体を構成し、ある特定の思想を具現し、一つの教義を表わし、一つの行動原理を執行し、思考と行動の諸原則を供するであろうと申し上げているにすぎません。この団体は一つの生きた教えを生み出すでしょうが、その教えは時が経つにつれて一つの自己永続的な伝統という形態をとり、しばしば言われるように「地霊」になっていくでしょう。その地霊はそれが誕生した家に住みつき、その加護のもとに次々と送られてくる人間一人ひとりに多かれ少なかれ浸透し、彼らを形成するのです。

「目上の者」の直接の教えに頼らない、一種の自己教育が「プロテスタント社会、英国」の学園に存在しているのは、このような事情によるのです。そこには独特の思想傾向、共通した判断の基準が見出されますが、そうしたものはそれに身を委ねた個人の中で發展しますので、学生一人ひとりの精神に明確な刻印を押し、かつまた、それが当の学生と他者との間を結ぶ絆をつくり出すことによって、学生にとって二重の力の源泉となるのです。この効果はまた、学校当局が共有するものでもあります。と申しますのは、当局者自身そこで教育を受け、終始その学校の倫理的雰囲気の及ぼす影響に身を晒しているからです。さて、ここに、その規準や原理が何であれ、真実であれ偽りであれ、真の教育があります。それは少なくとも知性の練磨に資するものであり、少なくとも知識が断片や細目をただ受動的に受け入れるといった類のこと以上の何かだということを認めています。それは相互の共感や相互の交わりといったこととは無縁の教師団がいかに奮闘してみても決して生まれないあるものであり、その何かを為すのです。それは、敢えて主張すべき何らの意見ももたず、共通の原則もたず、師を知らなければお互い同士の顔も知らないような若者たちに、多種多様ではあっても包括的哲学によって結ばれていない多くの科目を、週に三回か、年に三回、あるいは三年に一回、さもなくば、もったいぶった記念日に冷え冷えとした教室で教えたり質問したりしているような、一群の試験官たちからは生まれてこないでしょう。

10

いや、独学の方が、どのような形であれ、極めて限定的な意味合いにおいては、実に多くのことを教えながら実際には精神にほとんど資するところのない教育制度よりはましです。知識の信奉者に対して皆さんの「大学」の門を閉じ、その人を自己の精神の探究と努力に引き返させなさい。そうすれば、その人は皆さんの「バベルの塔」に登らずに済むだけ得をするでしょう。実際は、教師の刺激と援助なくして、一人残されて、ともかくも何事かを為し得る人の数は極めて少ないのです。そして、そのような誰の助けも得られぬ試みから、道徳的罪悪であるにとどまらず、真理へと到達する重大な障害ともなる独立独行、自惚れに陥らないですむ者は（そういう偉大な精神を探し出さねばならないのですが）、さらに少ないのです。また、自分の基礎知識の不完全さや知識の裂け目、欠陥、偏りによって、自分の提示する意見の奇矯さや原理の混乱などによって、自分が不利な立場に立っていることを時折思い起こさない人などほとんどおりません。おそらく皆無です。そのよう

な人たちは、誰もが知っていて当然視していることを知らないことが多く、触っても感じられないくらい細かい、絶えず積み続けている埃のように、精神に降り積もる幾多の小さな真理を知らないことがあります。彼らは人と語り合うことができないのかもしれませんが、頑迷に自説を主張するかもしれません。また実にひどい逆説や全く自明の理を誇らしげに披瀝するかもしれず、自分の軌道を逸れることを好まず、なかなか他人の心を思いやろうとせず、自分流のものの見方しか眼中にないのかもしれません。しかし、彼らの頭の働きにこうした傾向があり、その他どのような傾向があるにしても、彼らは、真面目ではあっても精神を酷使している者たちよりも多くの思想、精神、哲学、より真実なる拡大を手にしそうです。この人たちは、試験に備えて二十もの科目を無理に詰め込み、思索や調査に専念するには余りにも多くのことを抱えすぎていて、盲滅法の貪欲さで前提と結論をむさぼり、学問全体をすっかり信じ込み、論証を暗記し、そして、当然予期されることで、教育期間が過ぎてしまうと、いやいや学んだことをすべて放り投げてしまって、おそらく習慣となった勤勉さ以外は、熱心に努力したにもかかわらず、実際には何も得ていなかったのです。

しかしながら、これらは私たちのまわりで進行している、あの野心的な教育制度の成果のうちでもましな方の見本です。と申しますのは、普通の人々や並みの学生に現われる成果は、それ以上に満足しかねるものだからです。これらの学生たちは、学習科目が多すぎるために（その学習科目も本当には習得していないのです）、ただただ消耗し弛緩したまま教育の場を立ち去り、自らの浅薄さを理解し得ぬほど浅薄なのです。活動的で、思慮に富んだ知性にとっては（そのような知性が見出されるとして）、かくも下劣な骨折り、かくも侮辱的な徒勞に携わるくらいならば、「コレッジ」や「大学」など一切避ける方がどれほどよいでしょう。独立心旺盛な精神にとっては、教育の基礎固めを済ませた後は、手当たり次第に図書館を涉猟し、目にとまった書物を手に取り、もって生まれた才知が示唆する思想のつながりを追い求めることのほうがどんなにか有益でしょう。山野へ踏み入って、あの追放された公爵と「木々にことばを、流れる小川に書物」〔シェイクスピア『お気に召すまま』2・1・16〕を見出す方が、どんなに健康でしょう。また、着想においても出来ばえにおいても英語で書かれた最も感動的な作品の一つであるあの「詩」に登場する貧しい少年の教育の方が、どれほど純粋でしょう。その少年は、広大な世界ではなく、寡婦の母親の実家のまわりを日々散策するだけの、狭い野の「器用な落穂の拾い手」で、

村の学校も書物もほとんどない

乏しい環境の中で、渚、埠頭、漁夫の小船、宿の炉ばた、商人の店先、羊飼いの散歩道、密輸業者の小屋、苔むした荒地、そして鴉の鳴き声、休むことを知らぬ波——こうしたものに想を得て、自分ひとりの哲学と詩を作り上げたのでした！

しかし、私は必要な限度を超えて、大きな問題に入り込んでしまいました。皆さん、私はここで突然話を終わらせ、必要とあらば、この議論の要約を他日に延期せねばなりません。

原注)

- 1) 以下の頁〔四、五、六節〕は著者の十四回目の（オクスフォード）「大学説教」からほとんど逐語的に採録されている。この説教をこの「講演」執筆の際、翻刻することになろうとは著者はついぞ思わなかった。
- 2) 〔ジョージ・〕クラップの『館の物語』（1819年）。この詩が三十年ほど前はじめて出版された時に、私は読んで、大いに愉しみ、以来ずっと愛誦している。最近再び手に取り、以前にも増して感動してしまった。この詩は、若き日にも、年を重ねてからも、人を愉しませることのできる作品で、（論理的に言って）「古典」の付帯的定義を満たしているようである。（さらに二十年が過ぎたが、私は今も変わらずこの詩の愛好者である。）

本稿はジョン・ヘンリー・ニューマン『大学の理念』（*The Idea of a University*, Oxford: at the Clarendon Press, 1873; 1976）第六講演「知識と学識」の全訳である。訳注は活字のポイントを落として本文中に入れた。